

芸術の秋 その3

天高く馬肥ゆる秋であります。
「空の青さを見つめていると、私に帰るところがあるような気もする」といったのは、谷川俊太郎です。

『空の青さをみつめていると』
空の青さをみつめていると
私に帰るところがあるような気がする
だが雲を通過してきた明るさは
もはや空へは帰ってゆかない

陽(ひ)は絶えず豪華に捨てている
夜になっても私達は拾うのに忙しい
人はすべていやしい生れなので
樹のように豊かに休むことがない

窓があふれたものを切りとっている
私は宇宙以外の部屋を欲しない
そのため私は人と不和になる

在ることは空間や時間を傷つけることだ
そして痛みがむしろ私を責める
私が去ると私の健康が戻ってくるだろう
昭和28年刊『六十二のソネット』より

「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」これは、徳川家康の家臣であった本多作左衛門重次が、戦場から妻に送った手紙文として知られ、簡潔にして要を得たこの文は、手紙文の手本として今日でもよく紹介されています。

空高くどこまでも青い、馬肥ゆる秋の日々に、やがてくるであろう光薄く、じっと耐える日々の冬の季節を感じ始めているのは、私だけでしょうか。

虫の響きも少しずつつかすかになり始めていると思うのは、私ばかりでしょうか。

